

「中絶 NO!」のフィロソフィー

清野 喜久美

月寒グロリアクリニック産婦人科・小児科副院長・総婦長(札幌市)

私は助産婦で、現在「中絶 NO!」を理念とする月寒グロリアクリニックで、副院長・総婦長をしています。開院して7年目、今までに約70人の中絶希望者が受診しましたが、そのうち16名の女性が中絶をやめ、産む決心をされました。

妊婦さんが初診時、中絶を望んでいることが分かると、私は外来に同席します。まず産婦人科医である院長より「命は神が創造されたものであり、人間が作ろうと思ってもできるものでない」というお話と、医学的側面から心身への侵襲についての話があり、引き続き私がカウンセリングを担当します。

中絶希望者は、当院が中絶手術を行なっていないことを知らずに来院します。考えた末での受診であり、1人ひとりの苦悩は深く、簡単に気持ちは変わりません。決心が変わらないまま、他院にて中絶すべく診察台上がりエコーに写る胎児を見て、そこで初めて産む決心をされ、当院に戻ってきて出産した方もいました。また、その方にとって私たちが熱心に話を聞いてくれた初めての存在であり、おかげで中絶をやめて産む決心がついた、という方もいました。悩んだ末に産む決心をされた方は、命の重みを感じ、今、生き生きと子育てをなさっています。

私が中絶を阻止しなければと思うようになったきっかけは、今から33年前に介助した妊娠中期の骨盤位中絶でした。そのあまりにも残酷な光景に思わず目を覆ってしまい、「汝、殺すなかれ」のことは

が胸に突き刺さり、“私は助産婦であり、元気な赤ちゃんが生まれ出るための働きをしたい”と願うようになりました。

それからは「中絶業務に携わらない」という理由で病院勤務を辞め、自宅開業助産婦、保健所保健婦・保健所助産婦に転身。その中で、母子問題や育児力の低下等、周産期にフィードバックすべき課題が多いことに気づきました。思春期、更年期の心身の健康に中絶が大きな影を落としていることも再確認したのでした。性教育で命の尊さを伝

えることや、新しい命を夫婦や家族で迎えることの大切さも実感しました。

この間私は、「小さいのちを守る会」のボランティア活動を通して、中絶で悩んでいる方との関わりを続けてきました。そしてその後9年間助産婦教育に携わる

中で、「北海道小さいのちを守る会」の設立に関わり、中絶阻止のボランティア活動を展開。中絶しないクリニックの必要性を感じ、当院の開設に携わった次第です。胎児も人間です！この小さいのちを守らなければならない、と思っています。

知識がなく選択肢を知らないために中絶してしまい、後に不妊症や罪悪感で心の病に苦しむ女性が多くいます。そんな人たちを増やさないためにも、私たち医療者は、中絶希望者にその弊害を知らせる責任があると思うのです。

特に中期中絶は助産婦が携わることになります。「中絶 NO!」と、皆で唱えてみませんか。

